

南方（ビルマ）

戦前・戦中ビルマ回顧録

長崎県 嶋森 一 明

嶋森さんは戦前ビルマで民間人としておられ、戦争開始と共に内地から再び渡緬の命を受け、戦闘にも参加されたそうですが、貴方の自筆のミヤーマン回顧録も拝見させて頂き、お兄さんの意志を継いでの執筆と聞きました。

私は大正七年八月二十九日長崎市で生まれ、水産学校を出てから、姉夫婦をたよってビルマに行きました。兄も先に渡緬して歯科医を開業していた関係から、私もビルマで水産の仕事をしたと思うってビルマ

へ渡りました。

二年程経って、店の前の大通りは英米の「援蒋ルート」となり、昼夜かまいたく幌付きの大型軍用トラック（米国産）の行列でした。そのトラックも、国境の幾山河を越え、日本軍機の銃爆撃をくぐって、雲南省・重慶まで何台となく遠い道程を経て着いたことなのでしょう。

そのころ、華僑の日本商品「ボイコット運動」が始まり、映画館などでの邦人を見る目が変わってきました。日本軍の仏印・タイ国進駐等の情報で、いよいよ日本は米英とやると直感し、三年の生活を捨て最後の引揚船「日枝丸」（日本郵船の客船二万二千トン）で、昭和十六年十二月神戸港に、兄と二人で帰国しました（姉夫婦は半年前帰国）。

数日でハワイ海戦。そうしたら、東京の東部第十一野戦憲兵隊の上砂憲兵大佐から電報で、○日○時までに出頭せよとの命令でした。兄弟二人で出頭すると、ビルマの実状を聞かれた。直ぐに陸軍通訳として採用され、○日○時宇品港に集合を命ぜられました。他の出征者は万歳々と送られました。我々二人は隠密に宇品へ、万歳なき淋しい従軍でした。

四月二十五日、宇品港出帆、婦人会からの差し入れの豚汁など、今でも忘れられない。船は病院船「マニラ丸（八千トンぐらい）」、わずか四ヵ月でのビルマ再渡航です。台湾高雄に寄港、同行の憲兵ばかりで高雄神社へ参拝したが、ただただ暑いという印象が残っています。

サイゴン上陸は五月二十日、陸軍通訳（判任官待遇）証書を、南方軍司令部内で陸軍省より拝命、同二十九日、南方燃料廠付となる。そしてビルマ支廠に転出のため六月十日、「大日丸」で出航、途中シンガポール港に寄る。岸壁で白人の捕虜が上半身裸体で砂糖運びをしていた。偕行社で長靴など求め、三十日小雨降る

サイゴン上陸。爆撃で廢墟と化した街の一隅にある廢ビルで雨をしのぎ、航海後の疲れを癒しました。

当時、原油を送るポンプ場や油送管を敵機は狙っていた。エナンジョン油田は一番大きかったようで、油をラングーンの製油所へ送ったのだが敵機に狙われるので、筏の下にドラム缶を下げて（何千本か）河を下った。筏の長さは二百メートルぐらいだったか、大きいものだった。三回ぐらいは成功したが、スパイがいたのか飛行機にやられた。現地人はボーハイターという戦闘機だといっていたが、その戦闘機に追い回された。筏には日本兵が何人か乗り、現地人が棹さしていたが、敵機に射たれると河に飛び込んで退避してしました。

私たちは、エナンジョン油田へマンダレー街道廻りで軍用トラック二十台で出発。途中「ペスト病」で兵隊四、五名死亡。サガイン鉄橋が破壊され通行不能なため筏で渡河する。後日、橋桁から橋桁の間百メートルぐらいをチーク材」で組み立て車両を通過させられるようになりました。

「兄弟で南方燃料廠勤務ということですが、貴方は何処へ行かれたのですか。」

兄一義はエナンジョン油田本部、私は対岸のミンブ支所に配属になった。原油の輸送は前に申したように筏輸送でしたが、英機の超低空銃爆で苦勞しました。

ミンブ油田の隊長は毎月一回、私は三ヶ月ぐらいい回の割で本部へ連絡に行く。本部からの帰途「マゲエ町」「ミンブ町」の間のイラワジ河中洲を渡渉中、たまたま下流から英軍のボーファイター戦闘機二機と遭遇する。ビルマ人二人と若さにまかせ畑の中を右往左往逃げ回り、無我夢中に走り続け、腹這いの連続で遮蔽物も無く、身辺は機銃の嵐、二機で繰り返し掃射して最後は諦めて上流の方へ飛び去った。

二、三分後大音響と共に「エナンジョン」付近からモクモクと真黒な煙が天高く揚る。油田施設が被害を受けたようでした。九死に一生を得た思いだったが、私の服装を見て将校と間違え、執拗に銃撃したのだと思います。

「通訳としてビルマに行ったわけですが、徴兵検査

はどうなったのですか。」

適齢になってから一回徴兵延期願いを領事館に出していたが、昭和二十年四月十日、ラングーンで徴兵検査を受け、独立歩兵第三百三十八大隊（独立混成第二十四旅団、敵一五八一五部隊）へ入隊、モールメンだった。在留邦人は皆延期していたが、仲間には現地徴集と初年兵で百五十人ぐらいいました。

モールメンでは全然情報が判らないが、日本軍は撤退はしていなかった。我々はゴム林の中で訓練したが、若い少尉が張り切り切って年寄りのオッサンをしごく。蔭で少尉が張り切り過ぎるので「馬鹿が」といつていた。私は兄と一緒に部隊で、彼は、一・八メートルある大男だった。

（南燃の時は何百という現地人を集めて指揮していたのだが、南燃には新潟や秋田の兵隊が多かった。

油田の関係でしたか）

訓練中は空襲が多く、将校が十人ぐらい、初年兵も四十人ぐらいが、銃爆撃で戦死した。空襲が終わると死体を集めて焼くのだが（荼毘）、なかなか焼けないの

で石油をかけて焼いた記憶が鮮明にあります。

―終戦間に軍属から軍人になったわけですが、終戦の時はどうでしたか、ビルマは撤退撤退の最中だったと思いますが。

そのうちに終戦となった。その時、陛下の放送は聞こえた。隊長は私たち兄弟に「もともとは通訳だから身の安全のため、何処かへ行け(後の戦犯のおそれ)」といわれた。そこで私たちは一晩考えて、二人で泰の方へ行くことにした。火器を持たぬ方がやられぬといわれたので、乾パンだけは持たされたが、途中雨に濡れて捨ててしまった。タバコだけは飯盒に入れたが、食う物が無くてニッチモサッチモいかぬので、兄はとに角ここで寝ようという。

今考えてもゾツとする。虎・コブラ・錦蛇・山蛭がいる。山蛭が脚絆の中へ入って血を吸い丸くなっている。その辺は人が通った跡が無い。戦前、私たちはマンドレー、メンヨーなどにいたが、その辺は道があった。そのうえ気候も良く一年中春のようだった。それに比べると天国と地獄でした。

腹がへり、足は動かない。どうしようもないから寝ようとしたが、通った道を何時間かバックしたら竹で組んだ家を見付けた。そこには少数民族がいて、ビルマ語も英語も判らない。啞どうしだ。だが「寝る」「食べる」は判ってくれて、葉に包んだ食物のような物を出してくれた。薄暗い家で、家の中には子供が不安そうにしていました。

明日のことを考え、私は食物を少し残したら、兄は、「明日は明日だ、食べろ」という。兄弟でも考えが違った。そんなことが三回ぐらいあった。部落は無いが、離れた所(何キロも)にポツンと一軒家がある。道路が無いので藪を行く、腹がすくと仕方なく家を訪ねる。彼等は何という小民族だか判らなかつた。

そのうちに、連合軍の飛行機がピラを撤く、日本軍が山に入ったことを連合軍は知っている。ピラには「山から出てこい(ビルマ・英・日本語で)」と書いてあった。しかし、少数民族にはピラが読めない。

私たちは、朝日を見ながら東へ東へと、八日十日行つても山は延々とある。頂上へ登つても山また

山で、ここは雲南か、と思うと不安で仕方がありませんでした。はたして泰に行けるか、不安の連続だった二人で歩きました。

そのうち、知らぬうちに国境を越えていた。泰人に出会ったので、やっと泰に来たと思つた。道路で泰人からサボン（直径十センチぐらいの皮の薄い甘い）を買つてそれを食べた。何と交換したのか、未だに思い出せない。山の中で少数民族には向こうは要求しなかつたが、自発的に時計やタバコを渡していたのだが。

泰に入つて、バンコックまで歩いていったが、服装はポロポロの軍服、靴もポロポロだった。義姉（兄の妻）はタイの日本人会にいて薙刀の先生をやつていたので、その時の様子を知っている。私たちはバンコックの抑留所に約八ヵ月いたが、そこには一般邦人も兵隊もいた。兵隊でも在留邦人だからといって帰国した人もいた。抑留中、重労働は避けていた。暑い所ではきつくて体力的に参つてしまうからです。

私たちは部隊長の命令で軍から離れたので郊外の「バンバートン抑留所」に入所したわけです。梅雨時

だったので、メナム河が氾濫し、田畑のような大きな水溜り平野、そこに柱・板全部「チーク材」で出来たバラック建。四帖半二間ぐらい（屋根は付いている）と五段ぐらいの階段の上に踊り場（一メートル四方）屋根なし一間。この一戸建が千軒ぐらい並び、氾濫の水は深い所で八十センチぐらい、水面に竹柱で板道があり巾四十センチぐらいの板上を往来する。水の中には小魚もいる。

一晩経つて翌朝驚いた。水面のあちらこちらに大便が浮いている。便所が無いのである。その上、百足、サソリが柱を伝つて家の中へ上がつて来る。そこで夜は新聞紙を室一杯に敷いておく。百足やサソリが歩くとバサバサ音がする。カンテラに灯が付く時分には虫は何処かへ逃げて見えなくなる。

私は配給の油や木炭を取りに行つたが、木炭の中にサソリがいて、左の足を刺された。太股の付け根が、ドキンドキンとして疼いて歩けない。軍医に注射してもらつたが十日ぐらいでやつと歩けるようになりました。

その後、抑留所もだんだん水が引いて、そこを畑にしたり、音楽堂を建てたりした。各種の職業の人がいて共同、自活の生活をしたが、現地人の話では雨期の間、奥地の雨で「メコン・メナム河」が氾濫し、付近一帯は泥水・沼地となるとのこと、我々はその雨期に出合ったわけです。

抑留生活約八ヵ月、昭和二十一年六月三十日、「辰日丸」でバンコク出港、七月十一日、鹿児島へ上陸したのでです。

兄は帰国後、京都で歯科医をしていた。生涯二度と経験することはないであろう辛い長い旅路を重ねて、死を超越した力で国境を越えた兄弟二人、その兄も昭和五十九年に他界、生前この苦しい体験を、本にして出版することが兄の念願でした。私はそのため兄に代わって資料を整理しております。現在ビルマはミャンマーといっています。

ビルマの助人 狼兵団の初年兵

大阪府 二場 義照

―二場さんお若いが、志願兵だったのでか。

いや、大正十二年二月二十二日生まれで、十八年徴集、十九年三月十一日教育召集されたのです。それでは、ここに私の略歴がありますので、一寸読んでみます。

昭和十九年五月二十七日動員下令、六月九日編成完結。第四十九師団第六連隊通信中隊編入。六月十二日門司港出帆。十四日竜山着。二十九日ビルマ派遣のため竜山出発。

七月三日釜山港出発。同日南方軍総司令官隷下に入る。十九日シンガポール上陸。二十八日同地発。八月三日サイゴン着。八日同地出発。十六日仏印泰國境通過。九月二十日バンコク発。二十九日泰緬國境通過。十月九日ビルマベグー着。同日より十二月三十一日まで